剪枝世界で足掻け穂木よ

四ヶ谷波浪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「世界で一番強いのはベロニカちゃんだ」

※ｐｉｘｉｖにも投稿しています

目　次

剪枝世界の「勇者〇〇〇」 1
苗木の願望 6
空虚の器 10
存続の赦し 15
接木の執念 19
継続の意味 25
名無しの山羊 28
破滅の足音 32
なしのつぶて 37
浄化の炎 42
憐憫の愛（終） 46

剪枝世界の「勇者〇〇〇」

「世界」は刻一刻と枝分かれしている。それは枝を広げる樹によく似た形をしている。

例えば勇者ローシュが邪神ニズゼルファに敗れた世界。例えば勇者ローシュが過ぎ去りし時を求めた賢者セニカに救われた世界。

あるいは「勇者」が大事な仲間を失った世界。あるいは、過ぎ去りし時を求め「勇者」が犠牲を出さなかった世界。それは言うなれば、「幹」となった世界。

「幹」に至るまで……「勇者」やその仲間たちが魔王や邪神を打ち倒せなかった世界ももちろん存在する。そのような世界は世界の楔である大樹が情報のみを収集し、「次」の世界を試行するための糧となる剪枝（せんし）となって消え去るだろう。そうして世界は、「勇者」が犠牲を出さなかった世界をようやっと演算したのだ。

これは無数にある分岐の一つ。十六年前、ユグノア王国滅亡の日。まだ赤ん坊の「勇者」が……。

「なんつーかお前、勇者の紋章以外にもなんか変わったアザがあるよな」

カミュがぼくのほっぺたを突っついた。面倒見の良さと比例するようにカミュは存外身内と認めた相手には無遠慮な人間なんだ。ほら、ベロニカちゃんとのやりとりとかまさにそれ。ぼく自身は別に構いはしないというか、むしろぼくのことを親しく思ってくれている証

左のようで心地よくもあり、人間の距離感に戸惑うような気持ちもある。

これまで他者というのはただそこに在って、ただ静かに寄り添うものだと思っていたのだ。慣れないけれどこういう、なんというか少し騒がしい関係性もいいものだと思う。ぼくは結局のところ寂しかったから。

きっと「相棒」というのはただの仲間ではないし、友達やら配偶者ともまた違う、特別仲のいいものだ。ぼくはそのように学習したので同じようにほっぺたを突っつき返してやろうか検討し、やっぱりやめた。

カミュの顔には何もついていなかったので、突っついてやる理由にならない。わざわざびっくりさせてやることもない。カミュは見た目よりも繊細な男である。いや見た目通りかもしれないけど。変なことをしたらあとあとまで結構に気にするタイプというか。しっかり覚えているというか。

「なんか葉っぱみたいな形だな」

「形は違うけど腕とか足にもあるよ」

「おいおい、ぶつけすぎじゃね？」

「怪我のアザじゃないよ。生まれつきじゃないかな。気づいた時にはあったんだもの」

生まれつきだと思うものにそう言われても困る。じゃあカミュの髪の毛って丈夫な葦のように立っているね、と言いかけたが、恐らくは一般的ではない比喩表現に疑問が返ってきそうなのでまたやめた。相手の容姿についてどこまで言及すべきかはかりかねて。ツンツンの髪は結構いいなと思うのだけど、ぼくの髪は重力に負けっぱなしの様子だった。

というか、ぼくはまだまだおチビな苗木だけども、種族は人間にしても。せめていくつかそれらしいシンボルマークがあるのは当然ではないか。

とはいえ、カミュは親愛を込めて「カミュちゃん」と呼ぶとちょっと嫌がる程度には考え方が独特な人間なので……あんなに強いシル

ビアちゃんにあやかった敬意のこもった呼び方なのに嫌がるとは変わったヤツである……不思議に思ったのかもしれなかった。
「ふーん。変わってるなぁ。まぁ似合ってるぜ」
そっちから話しかけてきたくせにカミュはすぐに興味を失って、みんなの方へ歩き出す。
これはなんらかの返事が必要だったやつかもしれない。
「カミュの髪とか目は海の色みたいだ。ぼくの目は葉っぱの色。そういうものじゃない？　そんなに変わってるかなあ」
「じゃあベロニカの髪の毛が燃えてないのはなんでだ？」
「あっそうかぁ。そうだね、じゃあたまたまかぁ」
「ちょっとあんたたち！　おしゃべりしてないで行くわよ！」
お話に夢中になって足が止まっていたから怒られちゃった。ぼくたちは首をすくめて走り出す。なんせベロニカちゃんはこの世で最も強いので、万が一にも燃やされたくないじゃない？　彼女は笑っている方が素敵な女の子なのだ。
ぼくよりみんなずっと強いのさ。名も知らぬ生命力の強い草本のように伸びやかで、不屈の魂を宿している。温室育ちのぼくは強くなりきれなくて、地上に根差すことが出来ないで。二本の足は驚くほど軽やかに動く。そのくせ、今日もぼくはメラが成功しない。
耳を塞げばごうごうと、血潮が流れる音が聞けるだろう。この肉体は瑞々しく成長し、背丈も大きくなっていくことだろう。呼吸し、歩いて、食べるのに、ちぐはぐだ。
どうして、もうひとりではないのに。ぼくの指先は氷のように冷たいの。どうして、隣にいる仲間たちと隔たりがあるように思うのだろう。
ぼくはどうして、ここにいる？　ごうごうと、どこか遠くで冷たい川が流れている。

「母さん、おはよう」
　声変わり前のアルトボイスは軽やかだった。周囲は鬱蒼とした森だということを忘れさせるような朗らかさで、少年は機嫌よさげに伸びをした。彼は靴も履かず体に合わないサイズの服を着て、伸ばしっぱなしの長い髪と色濃く幼さを残すかんばせは、ともすれば彼を少女のように見せさえした。
　そして彼はうきうきと、今にも歌い出しそうな雰囲気で、ぴょんと立ち上がる。
「今日はとってもいい天気だね！　ぼくも日当たりのいいところへ行こうかな」
　くるりと周囲を見回した少年は嬉しそうに小高い丘に駆けだし、小走りの勢いそのままてっぺんで仰向けに横になった。下草に頬がくすぐられると、彼は心底愉快そうに笑顔になった。
「太陽が気持ちいいね！　ぼくにもみんなみたいに綺麗な葉っぱがあればいいのになあ」
　まだ彼はどこからどう見てもまだまだ親に庇護されるべき年齢だったが、ひとりぼっちだった。その大きな声での独り言は寂しさをごまかしているのかもしれなかった。だけども、彼はまるで母の腕に抱かれた子どものように安心しきった顔をしていた。
　彼は太陽を嬉しそうに見上げていた。その左手には奇妙な形をした紋章がくっきりと刻まれていた。彼はその紋章に愛おしげにキスをすると、空に浮かぶ大樹を眺めて微笑んだ。親愛をこめた、無垢な微笑みを。
　すると、はかったようにひどく冷え切った少年の身体にあたたかな春の風が吹き込み、かじかんだ指先をあたためた。
　おチビちゃんはたいそう喜んで、きゃっきゃと赤子が親にあやされたように笑った。
「母さん、ありがとう！」
　子葉はすくすくと伸びやかに。養分を吸い上げながら、ヒトの形を保つ。おチビちゃんの頬には隠しきれない葉の模様が刻み込まれ、手足には根のようなひび模様が無数に存在する。

しかし、いまだ彼は他の人間を見た事もなかったので、無邪気に母を慕う子どもであったのだ。己について何も知らず、課された使命も知らず、勇者として開花するその日まで。庇護の元育つのだ。冷たい肉体には大樹の加護を。そうなるはずだった成長を再現しながら、彼は非常に健やかに育つ。

食料の不足と裏腹に、劣悪な環境をものともせず、背は伸び肉を付け、何も教えられずとも大樹の知識……これまで大樹へ還っていった魂の集合知とでもいうもの……を吸収して、剣を振るい魔法を覚え、戦う者として伸長していく。

彼こそは大樹の加護を受けし、今代の「勇者」の使命を与えられし者である。いや。「ソレ」は勇者の器と呼んだ方が正しいのかもしれなかったが。

救われる者からすれば、どちらでも一緒だろう。

それは嵐の夜。古き王国の終焉の日。「勇者」として生まれた赤ん坊は、濁流に飲み込まれてそれっきり。無垢な魂は当然、両親のもとを目指しました。

苗木の願望

女神像の加護のもと。旅人たちに愛されるキャンプ地には今日も穏やかな時間が流れている。

頭から足先までぽかぽかしていた。腹の底まであたたかかった。目の前には焚き火がぱちぱち燃えていて、薪がどっさりあって、その上ぼくの手の中には腹いっぱいになれるほど安全でうまい食い物があった。鍋が煮えていて、ふつふつとよくあたたまっているのがすぐそばにあった。しかも近くには信頼出来るやつらがいて、なんならこのまま寝てしまっても良かった。

その良さを口に出して伝えたいくらいだったけど、母さんはここのところずっとだんまりだったから言わないでおいた。それさえ、ちっとも気にならないくらい満ち足りていた。

雨上がり、空がぱぁっと明るくなった時のような晴れ晴れしさ。待ち遠しかった春が訪れ、枝から新緑が一斉に芽吹き、大地からは新芽が飛び出す土の香りの季節のような浮き立つ気持ち。

隣に座っているカミュもおれと似たような満ち足りた顔をしていたから、わき腹を小突いてやった。ねぇ、ここってちっとも寒くないよって。すると、すっげぇここってあったけぇよなって顔でこっちを見てきた。なにせぼくたち、相棒なのだ。相棒というのは少しも喋らなくたってぴったり心が通じるのだ。

恐らく、カミュとは全く違うところで育ったのだけども、不思議なくらい纏う空気が似ていた。他のみんなもすごくいいやつらなのだけども、まったく考え方が違うのだ。

彼女らはデルカダールの下層に仕方なく身を寄せて住民どもに石を投げられたことだとか、ひもじい腹を抱えて歩いていたら野良犬にひどく吠えられたとか、店に並んでいるパンを盗むかどうかずーっと考えた末にしないでおいて、しないでおいたのだが前を通っただけで店主に言いがかりで箒で殴られたことなどまったくなさそうだった。ずぶ濡れのまま寒くて寒くて眠れない夜も、指先が冷え切って感覚がなくなるのが続くのも知っていそうにない。

そんなこと、絶対に知らないほうがいいのだろうけど、その苦い経験のあるなしは、目に見えない蜘蛛の糸のような確かな境界線を生み出しているようだった。つまりぷちんと簡単に千切れるのだろうけど、払いのければ手にまとわりついて気になって仕方がない……そのような具合だった。

カミュとぼくは、言うなれば、大きくなるまであまり恵まれていなかったのだ。だけどそれはこれまでの話だ。今はこんなに満ち足りている。とても幸せだなぁという顔をして頷きあった。カミュはきっと手先から足の指先まであたたかだろう。

「どうした食わないのか？」

「食べるよお。今、感動に忙しいんだよ」

「あー……なら俺の分も食うか？」

「ヤダよ。みんな腹いっぱいじゃなきゃヤダ」

「なんだ、腹減りすぎてへばっちまってるのかと勘違いしたぜ」

「腹いっぱいだよ。まだ入るけどさ。感慨は大事だよ」

「誰も取らないもんな……」

「そうだね、そうさ、その感動が増えたね！　もうちょっとしみじみさせておくれよ」

カミュだってまだ入るだろうに。譲ろうとするなんて。ぼくとは違ってきっと誰かと一緒に身を寄せあって育ったんだろう。食べられるうちに食べなきゃということは誰よりも知っているだろうにそうするってことは、年下のぼくがその誰かにちょっと似ているのかもしれない。

だけども、今はカミュもぼくも、ほかの仲間たちだっていっぱい食べられるのだから譲る必要なんてないのだ。しかも、満腹すぎて動きが鈍ることを恐れる必要だってないのだ。あぁなんて素晴らしいことだろう！

すると、焚き火をはさんで真向かいにいたベロニカちゃんが笑った。ベロニカちゃんのばら色のほっぺが焚き火に染まって、幸せの色をしていた。

「あら、おなかいっぱいで感動してたの？」

「そうだよ！　しかもぼくだけじゃなくて、みんなでいっぱいなのさ！　ここはあったかいし、このまま寝たっていい。なんて幸せなんだろうね。……母さんもそう思うでしょ？　えへへ。そうかな」
「……なにか返事はあったの？」
「なーんにも！　そうだねって言ってくれたつもりになってた」
「あら、お母様ったらつれないのねぇ」
　同じく幸せの色のほっぺをしたセーニャちゃんが大きな紫の目をぱちぱちさせて、幸せの色のシルビアちゃんがにっこりした。ぼくの隣で火に照らされて全身幸せの色のカミュはもう頭の後ろで手を組んで大あくびをしていた。ぼくもあくびが移って大あくび。
　ここのところ、ぼくはとてもとても幸せなのだった。キャンプの準備が出来ている今、寝たくなったら寝てもいいのだ。
「さぁみんな、そろそろ寝ましょうか！」
　ぼくはシルビアちゃんにはぁいと返事をして、胸のうちで母さんにお休みを言って目をつぶった。
　母さんは今日も何も言わなかった。母さんはいつだって、生きていくために大事なことしか言わない。きっと胸に何らかの事情で剣を突き立てようとしたら話してくれるだろうし、なにか間違って毒を飲もうとするならきっと止めてくれるだろう。
　本当はわかっていた。母と呼ぶ偉大な存在に仲間たちのようなあたたかさや近しさはないのだと。しかしそれでも性別すらなさそうなその存在に救いを求めているのだ。十六にもなって。
　なんせ、ぼくは母さんに護られて育ったのである。その大いなる慈悲にずーっと包まれてこれまで大きくなったのであるから、今更一日や二日で親離れできないのだった。
「おやすみなさい！」
「えぇおやすみなさい」
　およそぼくの知っている中で最強の少女が笑っている。火、というのは何物にも代えがたい叡智の末に制御できるものであり、生きとし生けるものを害することも出来る矛である。それを自在に操れるのだからベロニカちゃんは最強なのだ。この世で一番強いに違いない。

正面から戦って勝てる気がしないんだもの、これはぼくの強さがどうこうとかいうことじゃなくて、そういうものなのだ。
雪が冷たいように。空に母さんがいるように。当たり前のこと。枯れ葉は簡単に燃えるようなもの。
彼女が健やかでいる間は世界の平和は保たれているだろう。なんて心強い。なんて、闇を払うユウシャが思うことじゃないんだろうけど。
ね、母さんはどう思う？
返事はない。あったことなんてないのさ。
……いつか、ぼくとお話してね。おやすみなさい。

空虚の器

また新しい仲間が増えるらしい。最初はただそのように思っていたのだけどこれまでとは少々事情が違うみたい。カミュも双子ちゃんもシルビアちゃんも素敵な仲間なのだけども、どこか遠い地で育った人間だ。つまり、出会って初めて人生の枝葉が触れ合ったのだ。

この目の前の二人はぼくを知っていた。恐らく、母さんに出会う前の、芽吹いたばかりの子葉のころを知っていた。

赤い帽子のロウじいちゃんは実の祖父だと名乗った。ぼくの「母」の父だと言った。母、というのは母さんのことではない。理屈の上では理解している。ぼくは母さんの本当の株分けではないのだから。ぼくの種族は人間であって、しかるにぼくを赤子になるまで腹の中で育てた「母」がいるに違いなかった。なにせぼくの髪の色は美しい新緑ではなく枯れ葉の色であり、根ではなく足が二つあって大地を駆けるのだから、母さんの子であっても人間なのだった。

ぼくは無学な人間だったが、あまり無知ではない、と思う。なにか必要な知識があれば、常にぼくを見ている母さんに紋章を通して様々なことを理解させてもらっていた。人間と会話する機会が少ないという事実も、膨大な知識によって多少は誤魔化される。だからなんとか噛み砕いて状況を理解したのだった。

「一応、わかったよ。ぼくは状況的にロウじいちゃんの孫のイレブンという男の子だろうってのは。もちろん覚えてることじゃないし、まぁそうだろうとしか言えないけど、否定の要素もない。このユウシャの紋章や見た目とか、ぼくには変えようもないことだから」

カミュが良かったな！　という顔をしているのをちらりと見る。見た目よりも人情深いというか、優しいのが相棒なのだ。カミュにも血の繋がった人間がいるのだろうか？　聞いたこともないけど。

血縁者がいるのは、カミュの価値観……ぼくとよく似た価値観の持ち主……ではきっといいことなのだ。

「ただごめんなさい、小さい時のことはなんにも覚えてないけど……」

「それは当たり前のことじゃよ。今こうして生きていてくれたことが

嬉しいのじゃ」
「……うん。あと……イレブンっていうのは、ぼくには馴染みのない名前だから、呼ばれても返事出来ないかもしれない」
「それもそうじゃろう。別の名前で生きてきたのだから、今更名前を変えろなんてことは……」
「あっお前」
　カミュが慌ててぼくの顔を見た。カミュも多分、無学な人間だったが、ぼくより何倍も知るべきことを知っている。人間と話し慣れている。だからいつも良い助言をくれるのだが、ぼくは必ずしもその通りにできないのだった。
　きっと、今回も。
「おい、相手は血の繋がったじいさんだ。ちっとは優しく言えよな」
「優しく？　きつくは言わないよ」
「あー、えっとな、優しくっていうのはあんまりにも直接的な事を言わないってことだ。なんつーか」
「わかった。わかってる。なるべく頑張る。
　あのね、ぼく、名前はないんだ。名前っていうのは人間や魔物同士が互いに区別するための記号だろう？　これまで必要なかったから……」
　カミュが大きく首を振った。ダメだったらしい。頭でっかちな知識だけで人間とスムーズに話すのは難しいことなのだ。
　ロウじいちゃんの隣にいたマルティナちゃんという女性が、ぼくの顔をじっと見ていた。何かついているのかもしれない。
「えっと、ずっとひとりぼっちだったって意味じゃないんだ。いつも二株でいたの。でもあまりにも違ったから名前という区別は要らなかった。母さんってあちらを呼んだ。随分前にね、人間の親子をみて真似をしたんだ。母さんはそれを嫌がらなかった。あちらは決してぼくを呼んだりしないから……名前は要らなかったんだ。ぼくはぼく、枯れ草色の髪の、ぼくだ」
「……そう、じゃったか」
　なんだか、ぼくはカミュの言うように「優しく」言えなかったらし

い。なんだかがっくりとしてしまったロウじいちゃん。悪いことしたな、とは思った。何が悪かったのか分析し、次回に生かさなければならない。カミュならわかっていそうだから、ダメだった理由を聞いてできるなら模範解答も教えてもらおう。こういう対話においてのピンチは助けを待っても誰も助けてはくれないので。

「して。『母さん』とは育ての親かの？」

「ぼくが勝手に呼んでるだけだけどね。ほら、あの空に浮かぶ大きな木。ロウじいちゃんも見たことあるでしょ？」

「もちろんじゃとも」

「母さんはぼくが危険にさらされたとき、危険なことをしそうになったとき助けてくれたよ。紋章のチカラの使い方も教えてくれた。そういう時に話しかけてくれてそばにいてくれた。今もぼくを見ているよ。きっとね」

　そろそろ親離れしていてしかるべき年齢なのはわかっているのだけども。

「これから母さんを目指すんだよね？　初めて本当に会うんだよ。ぼく、楽しみにしてる。母さんの枝に触れたのも初めてで、とっても嬉しい。寂しくってもぼくは木になれないから、せめて近くに行きたかったんだ」

　でも嘘はつけないので。ロウじいちゃんに、ぼくは浮き立つ感情を隠さずに笑った。子どもっぽいと思われてしまったかもしれなかったけれど、仕方のない事だった。

「えーっとじいさん、オレたちが把握してることでいいんなら補足してやるから。ただ相棒は微塵も……その、悪意とかはないんだ。名前に呼ばれ慣れてないから、新しい名前をつけることも出来ない。相棒とか勇者とか、おいとかなんでもいいから名前ではない呼び方をすればちゃんと気づくんだが……名前で呼ばれることだけはどうにも馴染まないらしい」

　カミュが一生懸命ぼくの言葉が足りなかったのを取り返そうとしてくれている。そういうことしてもらわなくてもいいようにならないとな、と他人事のように思う。ぼくはカミュの言葉に耳を傾けて学

習することにした。次は失敗しないように。
「浮世離れしているっていうか。人間と話し慣れてないというか。コイツ的には植物の方に親近感があるっていうかな。そういうやつなんだ。名前で呼ばなきゃ、変わっているけど良い奴で……ほら知ってるだろ？　お人よしで、見て見ぬふりするんじゃなく手を差し伸べちまうようなやつなんだ。大樹の小さな苗木ちゃんっていうか……まだ黄緑のやつだ」
「カミュあんた迷走してるわよ」
「わかってるんだベロニカ。なんて説明したらいいんだこれ？」
「えーっと……」
「どうしましょう……」
「悪いヤツじゃないんだ。一時はデルカダールの下層にいたって話も聞いたがそこで邪険にされても決して盗みをしなかったってんだから頭が下がるぜ……なんか言葉遣いおかしいけど」
「確か、誰にでも『ちゃん』付けするわね」
「それシルビアのおっさんの真似らしいぜ」
「そうなの？」
「なんでも、いたく感銘を受けたとか。尊敬しているらしい」
　みんなが話しているから嬉しくなっちゃった。でも、目を閉じて話を聞いていたのがまずかった。ぼくは目を閉じてじっとしている時は速やかに寝るよう習慣づけていたから。あっという間に意識が夢の世界に引きずり込まれていく。母さんはよく寝なさい、とぼくに言っていたのだから何も間違ってはいないのだけど。言っていたっけ。全然話してくれないから、ぼくが勝手に言われたって思い込んでいるだけかもしれないけど。
　カミュたちがあれこれ説明しているのを聞きながら。体が重い。背中から根が生えたよう。眠ると大地と一体になって、ぼくは母のもとに行くのだ。ただの夢なのだけど。
　ざわざわと葉がそよぎ擦れ合う音、ざらざらとした幹、大地に抱かれて。美しい緑の根元でぼくは偉大な母を見上げ、手を伸ばす。ちっぽけなぼくでは届かないことを知りながら、木漏れ日を顔に受けて。

眠っている方が実のところ楽だ。体を動かすのはいつになっても疲れること。そりゃあそうか。
「あら、この子寝ちゃったわよ」
「そんなところじゃ風邪ひくぜ？　うわっなんだ地面にへばりついて持ち上がんねえ。体冷えてるぞ」
「毛布でもかけてあげましょうよ」
「そうそう。まだまだ苗木ちゃん、なんでしょ？」
「そういや苗木ちゃんって呼ぶ分には多分返事するが、仮にナエギって名付けたら返事しないと思うんだよな……」
「あらそうなの？　不思議な子ね」
マルティナちゃんらしき手が、ぼくの頭を撫でた。
遠く声が聞こえる。みんなの声だ。ぼくと同じ、人間の声。母さんとは違うけれど優しくて、母さんと違ってそばにいてくれる。触れることの出来る平穏。やわらかで、あたたかで、平和な今を愛している。
これが続けばいいな。根ではなく足を動かし、前へ進もう。みんなが笑顔で迎えるハッピーエンドまで。だって、もう寒くないよ。母さんがぼくのためにあたたかな風を送ってくれなくても。
穏やかで、あたたかで。ぼくはユウシャとして母さんに育てられたのだから。母さんがくれた唯一のこと。芽吹き、育ち、開花して。ユウシャとしての使命を果たして、幸せをつかみ取りたいんだ。
そうするのが、いい子なんでしょ？

存続の赦し

そこにはカタチが残りました。幸い、欠けのない「勇者」の雛形だけは現世に残りました。大樹は枝を伸ばしました。

この先失敗したならば、根幹世界を目指し、やり直すはずでありましょう。ならば、とりあえずこの末端世界ではこの雛形を使ってみようと考えたのでした。

そして然るべきのちにどこかの川べりで、赤ん坊が目を覚ましました。

「勇者」とは。特別な血を引いているから「勇者」なのか？

「勇者」とは。高潔な魂を持っているから「勇者」なのだ。

「勇者」たれと十六年間育てられた苗木は、「勇者」であろうと突き動かされて。ソレは一生懸命頑張りました。しかし、どの世界の枝でもそうだったようにこの世界の「勇者モドキ」も失敗してしまいました。

大事な仲間が死んでしまいました。世界最強であると信じていた、少女の死でした。

世界は焼き払われました。たくさんの人が死に、住まいを追われました。

魔物が暴れまわり、さらに被害が拡大しました。

ずっと見守ってくれた、偉大なる母は墜ち、二度と知識を授けてくれることはありませんでした。

ソレは頑張りました。ソレは、正解へ至りました。

ソレは、他の世界の「勇者」と同じように過ぎ去りし時を求めました。

しかしソレは、決して本物の「勇者」ではありませんでした。高潔

な仲間たちを見てきたソレは、代償を自分で支払いました。

斜陽であった。
目にもまぶしい美しい黄昏は、しかし世界の終わりと同義だった。時の終わり。世界の終わり。世界の行き止まり。世界のやり直しがまさに今、再び行われようとしていた。
「ねえ母さん、答えてくれよ。このところ、何にも聞こえないよ、ぼくの力不足を笑っているの？」
そこにいたのはまだ顔に幼さを残した瀕死の少年。奇妙な方向にねじられ、木の根のような形になって使えなくなった片足をかばいながらここまで体を引きずってきたらしく、彼の後ろには赤い擦り付けたような線が生々しく残されていた。傷の深さもさることながら火傷の残るかんばせ、焦げて短くなった髪、そして痛々しく涙の跡が刻まれている。頬には根を張る植物のようなひび割れがくっきりと浮かび、健常な形をした手は血色悪く枯れ木のような色に変わっていた。
「母さん。ねえ、ベロニカちゃんはいい子だった。ぼくよりずっといい子だった。小さくされちまってもひたむきでさ、妹が大好きで、努力家で、ぼくみたいなユウシャを助けようとしてくれたんだ。ベロニカちゃんが生きてる方がいいに決まってるよ。だから戻ったんだ。母さんも好きだったでしょ？　一生懸命で、母さんのことをちゃんと信じてるかわいい子だよ。火の魔法が使えて、この世でいちばん強かったの。でも、死んじゃった。ぼくたちを守るために、死んじゃったんだ。そんなこと絶対にダメだ」
饒舌な少年はなまくらになった剣を握っていた。そしてやわらかい内臓が腹からこぼれ落ちそうになるのを逆の手で抑えていた。見るからに瀕死だと言うのに言葉だけは明瞭で、奇妙なことだった。そ

れは少年の形をした大樹の代行者による世界へ向けた祝福の言葉であり、怨嗟の声なのだからこの世の何物にも遮られないのは当然だった。

少年は今、半分以上ヒトではなかった。今瞳を閉じて見ることをやめれば、呼吸することをやめれば、今すぐにでも地面に根を張り、緑の葉を茂らせ、大いなる呪いを撒き散らす呪木に成り果てるような存在だった。生誕する前からその肉体に与えられたチカラは暴走し、彼の体を変質させるのに充分だった。

しかし今、彼はヒトらしく何かを恨み、ヒトらしく足掻いていたから人間の形を保っていた。その精神性だけはようやくヒトらしいものとなっていて、皮肉にもあれだけ植物と同一になることに焦がれていたのに人生で最も大樹に近い存在となっていた。

その少年は年齢より幼く見えた。つらくてつらくて泣きわめく、幼子のようだった。その内面もまた、幼い子どものそれに近かった。

ヒトらしさを撒き散らしながら、どんどんヒトではなくなっていく。彼の肉体の時は止まり、流れ出る赤い血は光の粒子に変わり、瞳は新緑に染まっていく。だが彼は嘆いた。嘆いて、嘆いて、悔いていた。ヒトらしく後悔して、憤りをぶちまけた。

「母さん、シルビアちゃんとマルティナちゃんは、ぼくを優しく止めようとしてくれたから眠らせたよ。おじいちゃんとグレイグさんは厳しく正しいことを言ったから眠らせたよ。セーニャちゃんはずっと泣いていたのに、ぼくがいなくなるのは嫌だってまた泣いちゃったから眠らせたよ。ね、カミュは傑作だったよ、ぼくが自分の幸せを優先してないって言ったんだよ母さん。ぼくは自分のことしか考えてないのにね。自己中心的だからカミュのことも眠らせて、でもどうしても寝なかったからぶん殴ってきた。なんて酷い相棒だろうね。

ね、ぼくが悪い子だったからこんなことになっちゃったのかな。悪い子だったからベロニカちゃんは死んじゃったの？　悪い子だったから、たくさんのみんなが焼け落ちて、世界は崩壊しちゃったの？　いっぱい死んだんだ。植物も人間も。きっと正気だった魔物も同じ魔物に殺されちゃって、それで、それで……だから、ぼくは戻ったん

だ。時のオーブを割ったのに！」
鬱血するほど握りこんでいる剣を杖に彼は起き上がった。途端、ごぼりとおびただしい血を吐き散らし、それは鮮やかな葉に変貌し地面に散らばった。明らかに異様な光景だというのに少年は穏やかに笑っていた。生きているのが不思議なほどの、壮絶な姿だった。
「偉大なる母さん。大樹よ。ぼくをお導き下さい。これまでの人生と同じように。偉大なる加護をお授けください。今度はさ、過ぎ去りし時を求めた副作用とやらで……歩けもしない肉体にはしないでよ？
今になって、母さんに近づかなくていいよ。今度は、人間のままみんなを救わせてください」
そして、世界に向かって剣は振り下ろされた。
光の粒子に変貌した大樹の苗木は、時を遡る一枚の葉となって飛び立った。
過ぎ去りし時を求めて。

大樹は記録する。「勇者」が「過ぎ去りし時を求める」ということ自体はきっとよい結果を生むと。
大樹は記録する。「勇者モドキ」では、魂なき虚ろでは強度が足りない、と。
情報は必要である。いつか根幹世界に至るため。
剪枝世界は記録のために、存在を赦された。

接木の執念

今度は体になんの問題もない。足の形はまともだし、手だってちゃんと動く。多分流れる血も赤いだろう。魔法も剣も以前の通り使える。ただ永遠のような鈍痛が肉体を支配している。まあいいさ、今回「ねじれ、植物化した」のが体の中身だったんだろう。口の中の血の味が試しに食べてみた全部の食べ物を上書きするけど、動くのに支障はない。我慢してもどうにもならなかった前回に比べてみればなんて運がいいのだろう。体の中にまるで見えない植物が根を張り、ずーっと養分を吸い取っていくかのような痛苦だった。

たった二回しか試していないのに二回目でこんなに良いなんて。ぼくってばやっぱり母さんに愛されている。使命を果たしたら！きっとぼくは小さな木になるのだろうな。構わないさ。昔はあれだけ母さんのような存在になりたかったんだし、役目を果たしてみんなが幸せになれるならそれでいい。

ぼくは結構な、いや世界一の大罪人だ。みすみす魔王にユウシャの剣を奪われ、多くが失われたのだから。全て終わったあとに待ち構えていることは甘んじて受け入れなくては。大樹の加護の代償としては当然の結果じゃないか。

そして今度は二度とあの過ちを繰り返さぬよう、みんなに教えてもらった人間らしさを駆使して全く違う方法で世界を救うアプローチをすることにした。

わざわざウルノーガちゃん扮するデルカダール王に会いに行って投獄されることはない。カミュは別ルートで助ければいい。グレイグちゃん……じゃなかった、グレイグさんだって必要も無い罪悪感に駆られることもなくなるし。

ぼくは素知らぬ顔をして野次馬の一人に話しかけた。

「なぁなぁ、この騒ぎはなんだ？　見ての通り旅人だからここらのことには疎くてさぁ。お祭りか？」

「兄ちゃんったら呑気だねえ。これが祭りに見えるかい？」

「まぁ違うだろうとは思ってるけどさ。でもこんなに人がいて、騒い

でる。はやしたててさぁ。じゃあ祭りじゃね？」
「アッハッハ！　確かにねぇ！　これは祭りじゃなくて公開処刑さ。デルカダールの国宝、レッドオーブを盗んだ大悪党！　地下牢にぶち込まれていた盗賊カミュがとうとう火炙りになるってんで、みんな見に来ているのさ」
「へえ！　火炙り！　そりゃなかなか見れるもんでもないや。じゃあおれも野次馬になろうかしら。あ、余所者はお楽しみを見るな！　とか言われない？」
「そんなこと言うわけないさ！　見てけばいいさ！」
　黄色い歯の下品な婆ちゃんはカラカラ笑った。ぼくは体の震えを抑えながら、ニヤッと返して見せた。上手く笑えただろうか。
　あぁカミュ。助けないと。ぼくのかつての相棒！　同じように捨て子の境遇で育ち、同じように幼少期を飢えで悩まされ、同じように無学で、ぼくと違って人間の家族がいる相棒！
　ぼくには生まれた時から母さんがついてたけどさ、母さんって所詮はでっかい植物だもん。マトモに触れたこともない。見たことはあるけど、遠いし。話してくれるくらいだ。いや、ぼくがそう思い込もうとしているだけだ。でも、これだけ不運な生い立ちが似てたからぼくたち、いい相棒になれたんだ。ぼくが今度は投獄されなかったからカミュってば、逃げ損ねちまったなんて。らしくない。何かあったのだろうか。デクちゃんが賄賂を送っていたはずだけど。
　でもなんだっていい。あいつにとって初対面の知らないヤツでも、ぼくにとっては大事な相棒なんだから。カミュを助けないと。助けたあとはなんだっていいや。だってぼくの相棒のカミュじゃないんだ。カミュの見た目をした、カミュの人生を歩んできた、別人だ。これはただの自己満足なのだ。みんなを勝手に救うけど、それだけだ。
　みんなぼくのことを知らないままでいい。だから知らない奴がたまたま助けてくれただけってことにする。巨悪を勇者が打ち倒す。それも、そんなウワサを遠くで聞いただけの、ただの人間になるのだ。それでいいじゃないか。
　時間を巻き戻すのに失敗して半分植物になったぼくを見てしまい、

心臓が止まりそうなほど驚かせてしまったし、今のぼくも多分ちょっと見ただけでは分からないだろうけど人間たちをビックリさせてしまうような醜悪な存在であることには違いない。鼓動のようにどくんどくんと身体が脈打つ。だがきっとこれは鼓動ではない。この濃くなっていく緑の瞳は、太陽を拝むだけでご飯の要らない体の証拠だ。日に透ける緑がかった髪もそう。人間の形をしているだけの、化け物ユウシャこそこのぼくだ。

あぁなんて、ぼくってば！　母さんに愛されているのだろう！　今度こそ早く世界を救う使命を果たしなさいと食事の時間さえ短縮してくれたらしい。資金の問題もほぼ解決である。これぞ完璧な母さんの分け株であり、紛れもない大樹の苗木ちゃんなのである。

ぼくは人だかりを掻き分け、進んで行った。薪の積み上げてある広場の中央に男が引きずられてくる。青い髪、青い目、白い肌……間違いない、カミュだ。全身傷まみれだが、まだぴんぴんしている。

カミュを助けるのはわりと簡単だ。前に飛び出していってカミュに触れながらルーラでも唱えてトンズラすればいい。人が不意打ちに弱いのは知っている。成功するだろうと思った。でもとりあえずは様子を見る。カミュが大人しく処刑されるはずなんてないし、どうしてここまで抵抗しなかったのか、それとも抵抗が許されなかったのかが気になったから。

いつでも飛び出せるように最前線まで出た。険しい表情のグレイグさんと真顔のホメロスちゃんが両方揃っていてなんとも居心地が悪い。もちろん今の状態だとグレイグさんだって敵だろうし。

処刑の見届け役か、はたまた執行の号令のためか。威圧的な表情のグレイグさんに髪の毛を掴まれて顔をあげさせられるカミュ。ぼくはぐっと堪えて、機会を伺った。カミュは随分とボロボロだったが、五体満足ではあった。

目を腫らしたカミュがこちらを見ている。ぐるーっと見回して。誰かを探しているみたいだった。やっぱり元々の相棒のデクちゃんかな？

その時ふと、カミュがぼくの方を見た気がした。

何か言ってる。グレイグさんに。痛いからやめろって言っているのかな。なんにせよ火炙りするつもりなら処刑相手を離さなきゃどうにもこうにもならないだろうし、グレイグさんがカミュの髪の毛を離したらカミュを引っ掴んでルーラしよう。ぐっと足にチカラを入れて構えた瞬間だった。

「見つけたぞ！　相棒！」

「あの茶髪の男だ！　悪魔の子をひっ捕らえろ！」

あっと声を上げる間もなく、引き倒され、拘束されるぼく。戦闘経験は豊富とはいえ激痛が常にあるというコンディションが悪い状態でものすごい多勢に無勢では何ともならないというかまともな抵抗もできなかった。

いや。なんというか。何故か消えたはずの記憶を覚えているらしいカミュに売られたのがあまりにもショックだったのだ。ぼくにも人間に裏切られてショックを受ける、なんて人間らしい感情があったんだね。グレイグさんの方は覚えてないのかしら。覚えていないから「悪魔の子」なんて懐かしい呼び方をしたのだろうけど。

カミュ。なかなか前のように投獄されに来ないぼくに裏切られたと思ったのかな。そうだろうな。じゃなきゃカミュがぼくを売るはずないよ。カミュは人一倍ぼくに優しかったんだ。

……その優しさが、マヤちゃんへの贖罪のための、罪悪感から来るものだとしても。

「久しぶりだな相棒」

「……うん」

声は存外に優しかったように、思えた。多分ぼくがそう思いたかっただけなんだろう。顔なんてとても見れなかった。でも、そういうわけにもいかないから顔を上げれば、うっすら微笑んでいるような気さえした。自分の身勝手さに嫌気がさす。

辛かった。辛いって感情に最近突き動かされているような気がする。こんなに人間って辛いと思えるんだ。やっぱりぼくは母さんと違って人間なのだなあ。それも辛い。

カミュはだって、相棒だ。話さなくたって伝わるんだ。カミュはと

ても真剣な目をしている。なぁ相棒、また会えたなって喜んでもいる。なのに、ぼくを売ったのだ。そりゃあそうさ、カミュからすれば先に裏切ったのはぼくの方だ。

カミュは静かな目をして、ぼくに狼狽えるなと言っていた。ああ、わかったよ。ぼくはここで、君に糾弾されよう。それで少しでも気が晴れるならいい。ここで死ぬ訳にはいかないけれど、少しくらい痛みが増えたってどうということはない。ぼくの頬を思いっきりひっぱたいてくれよ。なぁ、拳で殴ったっていい。

こんなに傷だらけで。きっと辛かったろう。それでもぼくを信じてたんだよ。なのにぼくは来なかった。とうとう火炙りにされるって時になって顔を出した。カミュがどれだけ優しい人間だとしてもそりゃあ怒るさ。

あんまりにも長い間待ってたからあの脱出口がバレてしまって折檻されてしまったのかもしれなかった。デクちゃんも捕まったのかもしれなかったし、そうだとしたら全部ぼくのせいなのだ。

「グレイグ。お手柄じゃないか。どこで知り合ったのか知らないが、国賊のカミュが悪魔の子と知り合いとはな」

「あぁホメロス。たまには俺もお前のように策略をと思ってな。少し減刑してやってもいいとそそのかしてやったのだ。ホメロスならばどのように言うだろうと考えてみたのだが、お前のように上手くやれたか？」

「……いやはや驚いたなグレイグよ、本当に上手くやってみせたな。我らが王も誇らしいだろうよ」

「ホメロスの真似をしただけだ」

ホメロスちゃんは今もきっとグレイグさんを殺したがっているけれど、ウルノーガちゃんの前だからさすがにやらないようだった。それどころか純粋に驚いているように見えた。相変わらず、知っていれば魔物のような焦げ臭い匂いのする人間だ。遠くて見えないけれど、きっとあの目の奥には今も悲痛な闇が渦巻いている。母さんが倒すように指し示す、闇の手先だ。

倒せ、倒せとぼくを突き動かす声が聞こえる。母さんはもうぼくと

繋がりがないから、間違いなく幻聴なのにね。
ぼくを捕まえたことは、何も知らないグレイグさん的にはお手柄のはずだけど、表情が油断していない。険しいままだった。
「おい、事情聴取のため国賊カミュの処刑は一旦取りやめだ。悪魔の子と共に再度地下牢獄に叩き込め！」
両腕をぐいっと掴まれる。
「はは、痛いよ。もう少し丁重に扱ってくれよ」
ぼくは強引に振り払うことも出来たけど、やめた。なんだか全部報われていないような気がしてやるせなく、そのくせそれはただの被害者意識に過ぎないとわかっていたから。
とりあえずは殺されそうにないし、身を任せることにした。この場でカミュを連れて逃げようにも兵士たちにこんなにがっちり掴まれてちゃルーラに巻き込んじゃうだろうから。
「ぼくは悪魔の子なんだろ？　痛い思いをさせるなら、悪魔らしく目の前のやつの喉元、食い切ってくるかもしれないぜ。まぁやらないけどね」
投げやりに身体の力を抜く。絶対に歩かないぞ。担架でも持ってこい。全身の痛みに耐えながら自分で動いてやる気にはもうなれなかった。
目論見通りテコでも動かなくなったぼくは無理やり担架に乗せられてえっちらおっちら地下牢に運ばれたのだった。いっそここで根を張ってやろうか。
今ならこのジメジメしたクソッタレな地下牢を上にぶち破って大輪の花を咲かせられる気がする。

継続の意味

「なぁ」

カミュはとても気まずそうだ。ということを理解できるくらいには、前より人間の感情が分かるようになってきた。過ぎ去りし時を二回も求めたからか、今のぼくは母さんとの接続がもはや皆無だった。だから頭の中にある知識だけで勝負しなくちゃならない。

この世界の大樹も母さんなのだろうけど、どことなくぼくに戸惑っているような……いや、もしかしたら呆れているのかもしれなかった。ぼくは一度失敗し、せっかくやり直しの機会を貰ったのに二回目の失敗をしたのだから、なんて出来の悪い苗木だと思ったことだろうし。

母さんは、ぼくのことを決して呼ばない。ユウシャとさえ呼ばない。ユウシャのチカラをくれて、知識を分けて、それだけだ。話しかけてくれることもないし、ただそこに「いる」。

だから怒ってるとか呆れてるとかも分からないといえば分からないのだけどね。

「なんだいカミュ。怪我は痛くないかい。あ、この時期はまだ名前知らないはずだっけ……いやカミュは覚えているみたいだし……えーっと、敬意を込めてカミュちゃん？」

「カミュちゃん呼びは女みたいだからやめろって言っただろ……」

「女みたいっていうのはよく分からないけれど。ねぇ、怒ったの。ぼくがなかなか来ないから……」

「そういうわけじゃねえよ。グレイグのおっさんも覚えていたんだ。だからこうしてうまく合流するために一芝居打ったってわけさ。まぁお前がなかなか来ないから何かあったんじゃないかって心配してたんだが……」

「……今がいつなのかわからなくって。ラムダからルーラで世界を飛び回ってなんとか理解してたらこんな時間になっちゃったんだ。もちろんラムダの双子ちゃんはとっくに旅立ってて会えなくって……そっか。グレイグさんも覚えていたんだね」

言い訳だ。言い訳というのは良くない。事実だとしても言い訳だ。仲間たちの中で一番最初に命の危険があったのはカミュなのだからデルカダールにいの一番に来るべきだった。後悔がぼくを押しつぶす。

「じゃあ早くこればよかった。こんな場所から早く一緒に出て行くべきだった。グレイグにだって、望まない悪役をさせることになった……前は皆覚えてなかったから今回もそうだと勝手に思い込んでた……」

「前？」

「……詳しい話はあとにしよう。ほら、デルカダールの双頭の鷲グレイグ将軍のお出ましだ。相変わらずでかいのなんのって、大木かな。ぼく、前はすっごく怖かったんだよ。やっぱり大きいってそれだけで強いことじゃないか。遮られて、太陽の光全部奪われちゃうし」

「……今いいか？」

「いいよ、グレイグさん」

カミュを向かいの牢屋から出したグレイグさんがおずおずと口を挟んだ。前はあんなに威圧的だったのにそうじゃない。覚えている証拠だろう。なんだか背中を丸めて小さくなっているような気がした。天井はそんなに高くないけど、グレイグさんの頭がぶつかるほどじゃないだろうに。ぼくが前怖がっていたのを覚えていてくれているからなのかな？

「ホメロスとウルノーガが勘づく前に行くのだろう？」

「うん。ルーラで抜け出そうじゃないか」

頭をぶつけそうだけども、建物の中でも洞窟の中でもお構い無しに発動して好きなところに行けるのがルーラだ。格子越しにグレイグさんの手を掴み、逆の手でカミュの手を掴む。

「相変わらず冷てえ手だな。早く飯にしよう」

「そうだね！」

カミュはことある事にぼくをあたたかだけども恐ろしい火の前に追い立てる。みんなもぼくにあたたかい食事をしこたま食べさせようとする。体温が低いらしいから心配させているのだと思う。でも

ぼくにとってはこれが普通なのだけど、手先とかは氷のように冷たいらしい。ぼくの感覚がおかしいわけじゃない。ちゃんと寒いのはわかるけど、今は普通なんだけどな。

小さいころ。デルカダールの下層に住み着いていたころ。ぼくを文字通り箒で道端に掃き出した知らない人は、死体みたいに冷たい手をしているからきっと長くないって言ってたんだけど。まぁ今は今にも死にそうなくらい全身痛いけどさ。全然ぴんぴんしている。あれから十年くらい経っているのかあ。

「いくよ」

とりあえず双子ちゃんも覚えているならホムラにいるだろうし。あ、前のことを覚えているなら今度はベロニカちゃん、デンダちゃんに魔力を取られずに大きいままかもしれない！

世界でいちばん強いベロニカちゃんがもっと強いかもしれないな！　心強い！

ぼくはカミュに見放されていなかったことがうれしくって、グレイグさんが最初から味方であることが心強くって嬉しくなった。さあ仲間を集めて！　今度は誰も失わないように、ウルノーガちゃんを倒さなきゃ！

ソレは本物の「勇者」ではありません。それどころか本物の人間ですらありません。自分の正体を知らないまま、ソレは指し示された通りに動きました。

ソレは想定されていたよりもずっと人間のような言動をしました。

ソレは穂木でした。使命を認識する前に死んでいった、「勇者」の穂木でした。

名無しの山羊

しんしんと積もる雪を、窓からぼうっと眺める。今頃カミュは久しぶりに大事な妹ちゃんとおしゃべりしていることだろう。ぼくは邪魔したくないしこうして宿屋のあったかいところに退散させてもらったけど。他のみんなはどうだろう。みんなもあったかいところにいるのかな。カミュたちもせっかくなら場所を移した方がいいだろうに。

でも思い出に浸るも大事なのかなあ。ぼくが育ったあの森も……案外行ってみたら懐かしいかもしれないな。

随分ぼくも「情緒」ってものを理解ができるようになってきた気がする。

ぼんやりしていたら、部屋の入口にいつの間にかベロニカちゃんが立っていた。もちろん、あまり見慣れない大きな姿をしている。ミニスカート、寒くないのかな。言ったら怒られそうだけどクレイモランじゃ寒いよね。あったかい服を不思議な鍛冶したら着てくれるだろうか。新しく作るのはなにか不都合があるとしても、彼女のサイズはセーニャちゃんの流用で大丈夫だったし、セーニャちゃんのロングワンピースでもまだマシだと思うのだけど。

なんて。口に出さないほうがいい。ベロニカちゃんは自分でそれがいいと思っているからその恰好をしているんだ。

「ねぇ」

「なにかな、ベロニカちゃん」

「無理してるでしょ。どこか怪我してるとか体調が悪いとかあるでしょ。ベロニカさまはお見通しなのよ。そういうことはすぐ言いなさいよ」

「怪我なんてないよ。セーニャちゃんの回復魔法、一応かけてもらおうか？」

「……」

「ベロニカちゃんはお姉ちゃんで、心配性だ。だから寒くって縮こまっているぼくを心配してくれたんだね」

「誤魔化さないで」
「誤魔化してなんかないよ。服脱いで見せてもいい」
「……分かったわよ」
ぼくはもう、自分の表情がどうなっているのかもよく分からなかった。痛いというのも最早よく分からない。だからむしろ何も辛くなかった。体は動くし。
仲間を集め終えて、むしろホッとしているぐらいだ。ウルノーガちゃんを倒しに行くのはもうすぐ。そうして、ぼくはやっと休めるわけだ。
ベロニカちゃんが無事で。あとは母さんを守るんだ。そのあとウルノーガちゃんを倒して、それでおしまい。
眠気混じりの疲労がぼくの体を占領している。早く眠ってしまいたい。でも、悔いは残したくない。このあたたかなみんなが、今度は泣かずに済むように。
セーニャちゃんの長い髪。ベロニカちゃんが元気なこと。全部、良かった。あとは母さんのところで決着をつけるだけなんだ。
「……何考えているの」
「すっごくねむいんだ」
「あら、あたしがいるのにねむいなんて」
「ベロニカちゃんは最強の女の子だから、いるだけで、ぼくはとっても安心なんだよね」
「たまに言うわよねそれ。なんであたしが最強なの？」
「メラが使えるからね」
「それが理由？」
「そうだよ。誰だって焼かれたら死んじゃうでしょ」
「剣で斬られても死ぬ時は死ぬわよ」
「まぁ……そうかもね。でもさ、枝が切られても、幹が無事なら大丈夫でしょ。そういうことさ。火は最強、ベロニカちゃんは世界最強」
くすくす笑ったベロニカちゃんはぼくの隣に座った。ちょっとは心配も晴れたのかな。
そのままそっとぼくの手を取って、随分びっくりしたみたいだっ

た。
「なにこれ冷えすぎよ！　メラであったためてあげましょうか！」
「いいよ。大丈夫。そろそろ寝ようかな。あれ……」
「カミュが戻ってきたみたいね」
　ぼくが眺めていた窓の向こうでカミュがぼくらに気づく。ずんずん近寄ってきて、ベロニカちゃんがぼくの手を握っているのを見て。
　なんかすごく笑顔だね。楽しそう。そんなに妹ちゃんとの話が良かったのかな。ぼくも母さんと話してみたいな。
　窓越しにヒューっと口笛を吹かれたのが聞こえた。
「なんで口笛？　魔物が出ちゃうよ？　町の中だし大丈夫か。なんで？」
「……あっ！　アイツすごい勘違いをしているに違いないわ！」
　ベロニカちゃんがさっと立ちあがってカミュのところに走っていく。バタンと扉が閉まって、誰もいなくなった部屋の中が静まりかえる。
「ねむ……」
　ベッドに座る。勢いそのままばったり倒れ込む。ご飯はまだだけど、時間になればきっと起こしてくれると思うから、甘えちゃおう。ひと眠りしないと口にものが入ったまま眠ってしまいそうだから。
　食べなくても平気だけど、みんなを心配させるくらいなら腹にものを入れたほうがマシなだけで……汚い話をするとそのまま出るというか、吐いた方があとあと楽だとか、そういう状態だけども。
「……起きてる？」
　眠りに落ちる寸前、小さなノックの音が聞こえた。ベロニカちゃんが戻ってきたのか、はたまたカミュがごはんに呼びに来たのか。そう思って重い頭を持ち上げようとしたけど、眠くって眠くって力尽きた。カミュならザメハをかけてくれるはず。
「……眠っているの？」
　誰の声だろう。もうそれもわからない。ものすごくねむいんだ。ちょっとだけ眠らせて。なんとか最後の力でそう言おうとして。
「ごめんねイレブン、……」

ぼくを、決して名前で呼んではいけないよ。呼んじゃダメだ。ぼくはその人じゃない。いつかその名前を付けられるべき人がいるはずだ。そう言いたくって、でも。次の瞬間には眠りの世界。

ぼくは「イレブン」じゃない。他の何者でもない。名前を付けられていい存在じゃ、ない。

破滅の足音

この世界は既に切り捨てられることに決まっている。それも十六年前からそう決まっているのだった。

理由としては正しき「勇者」の魂なくして過ぎ去りし時は正しく求められない、どう転んでもこの「剪枝世界」は安定した正しい世界とはならないということだった。今にも肉体ごと崩れ落ちそうな「勇者モドキ」では、最後まで熾烈な戦いを駆け抜けられるかさえ怪しいのである。根幹世界になりえない脆弱な、とるに足らない失敗作である。

さらに言うなれば、ソレは最初から贖罪の山羊（スケープゴート）として生み出された。しかも盛大な言い訳として、である。この世界はどうして終わるのか？　と、もし大樹がほかの世界の大樹に尋ねられたなら、という想定のもと。

言い訳を用意しておいた大樹は戸惑うことなく「勇者」が本物ではないからだと答えるだろう。この世界は剪枝世界、「勇者モドキ」ならばどのような旅路と結末を迎えるのか観察するためのものだ、と。

なるほど正しい理屈である。今後存続していく根幹世界を創り出すことが使命であるのだから、そのために情報というのは必要不可欠である。あらゆるパターンを網羅しておくことに越したことはない。大義名分にどの世界の「大樹」も何も反論しない。自分がそうなったとしても採る、最善手であるのだから。

「ソレ」に同情し、「言い訳」という悪い言葉を使う方がむしろどうかしているのだ。

ソレには良くて巨悪と相打ちになるであろう未来が待ち受ける。どう足掻いてもヒトならざる哀れな山羊に未来はない。

なれば、最初からその想定をしておき、無機質に情報を収集して無慈悲に世界を閉じるのだ。

ソレに魂などない。ソレに安寧などない。ひとつの可能性を知るためにある、「勇者」の穂木。報われるためには存在していないのだった。

それはほんの少しの掛け違い。あの嵐の夜に、大樹が運命の赤ん坊からほんの一時、目を離しただけ。
その一瞬で、加護を失った「イレブン」という赤ん坊は幼き日のマルティナ姫と分かたれ。それだけならまだしも、目を離していた時間が長すぎて、荒れ狂う川に飲み込まれてそれっきり。
自我さえ危うい赤ん坊の魂は、血の繋がった母を求めてあっという間に飛び去った。
失敗を悟った大樹は「次」はマルティナ姫と離れた瞬間から見守っていようと決意したが、とりあえずは人間の魂モドキを急造し、勇者の肉体に押し込み、死なない程度に遺体に成長の加護をかけ、魂モドキに使命を果たせと刻み込んだ。
そして生まれたのが「ソレ」だ。
宿るのは真っ当な魂ではない。その肉体はとうの昔に死んでいる。温度を持たない癖に成長するソレは生物であるかさえ怪しい。
ただ、不思議な感性を持つ優しい子になった。別の世界で戦っている「勇者」とほぼ同じ道を選び、同じように強く優しく、誇り高くあろうとして。
ただ優しすぎて、無意識に己を他の生物たちとは決定的に違うのだと知っていて。
故にソレはあらゆる名付けを拒否した。自分は何者でもなく、何者にもなれないと知っていたから。
ソレは誰かのためにあろうとした。
ソレは必死に戦った。愛する母が最初から自分を見捨てていることを知らずに。真実から目を背け、気づかないようにしながら。
哀れな穂木よ。

魔王の剣は重すぎる。そうは言っても早々にグレイグさん不在で前よりも早く闇の力に傾倒したらしいホメロスちゃんに切り札なし

で勝てるかわからないから頑張って背負ってきた。
　ホメロスちゃんからしたらグレイグさんこそ颯爽と裏切ったようなものだし。うん。ぼくは「悪魔の子」らしいので。
　魔王の剣って「悪魔の子」らしい禍々しさがあってとってもらしい。カミュたちもドン引き。趣味悪いって「前」にも言われたけど今回も思っているのかな。ぼくの趣味じゃないのもわかってるからちっとも言われないけど。
「ねえ、大丈夫なの？　なんだかここのところ顔色が悪いような気がするのだけど……」
「マルティナちゃんもベロニカちゃんの心配性がうつったの？　大丈夫だよ。朝ごはんも全部食べたし、いっぱい寝てるし」
「そうね」
「みんな優しいよね。みんなこそ大丈夫？　万全？」
「えぇ……」
　大丈夫か大丈夫じゃないかだったら大丈夫。今だってちゃんと走れるし剣も振れる。手は自在に動くし痛くもない。母さんの足元は少しだけ寒いけど、やわらかな光が満ちていてお腹いっぱいなくらいだ。
　みんなも「前」……じゃなかった、「前の前」の記憶があるみたいで、ホメロスちゃんの奇襲は最早奇襲じゃない。みんな分かっているんだ。グレイグさんが最初からこっちにいることで少し変わってしまっているかもしれないけれど、その分みんなに頑張ってもらうというか、ぼくが頑張るというか。
　これまでのところ、魔物側に「前の前」の記憶はないようだったから本当に仕掛けてくるかは心配していない。状況が違うからやり方を変えてくるかもしれないけど……ベロニカちゃんが狙われないようにしなくちゃね。
　ベロニカちゃんがいればぼくがいなくても大丈夫だし。だってベロニカちゃんは最強だ。火の魔法を受けて死なないやつはいないよ。ぼくだったら掠っただけで致命傷だと思う。
「母さん……母さん！」

大樹の最深部にたどり着くと、もう耐えられなかった。ぼくは胸の内を駆け巡る郷愁のまま駆け寄る。ちゃんと後ろを警戒しているつもりだけど、まだ狙われないように手は伸ばさずに。ぼくが本当にユウシャで、ユウシャだからユウシャの剣を手にできるって確信するまではきっと攻撃してこないと思ったから。

あぁ、やっと！　やっと会えた！　二度目の再会だけど関係ない。初めて会えた時と同じように胸の内が叫んでいる。嬉しくって涙が流れた。

「会いたかった！　母さん……ぼくのこと、見ててくれた？　ぼく頑張るよ、これからも！　母さんが見ててくれるんだもの、頑張らなきゃ。ユウシャとして、闇を払う使命を果たして。もう誰も失わないように……」

はらりはらりと、何かがぼくから致命的ななにかが抜け落ちていくのがわかる。「前」みたいに血が葉っぱになっているわけじゃない。だってどこにも傷なんてないんだもの。

じゃあ何か。なんだろうね。わからない、わかりたくもない。とにかくもう、ぼくは限界みたいだ。本当に急がないと。母さんに縋り付く幼子ではいられない。母さんが指し示す通り、ユウシャとして頑張らないといけないんだ。ぼくはそのために生まれ、そのためにここにいるんだから。

あぁ、焼ける。焼けていく！　本当に燃えているわけではないけれどそう思った。焼け死ぬのと同じように、取り返しのつかないようにぼくが崩れていく……時間が無い。どんどん成り果てていく、ぼく自身がぼくでなくなるまでもう時間がない。

幸い、まだ体を動かすことだけは問題ない。

あぁ懐かしいみんな！　小さくても誰よりも強かったベロニカちゃん、短い髪の覚悟を決めたセーニャ、優しく抱きしめてくれたロウじいちゃん、ぼくの目標でありつづけたシルビアちゃん、ぼくを心底慈しんでくれたマルティナちゃん、清く正しくあろうとしたグレイグさん、そして根気よく何度も、こんな、真っ当な人間ではないぼくに名付け（祝福）をしようとしたカミュ。

ぼくに名付け(祝福)はいらないよ。祝福は他の機会にでも取っておくといい。でも、ありがとう。
「相棒、今なにか……」
「カミュ。なんでもない。なにもないよ、大丈夫、ごめん、取り乱した。ほら、ぼくの母さんだ。みんなも、ぼくも、ここから来たんだよね」
少しでも気を抜けば爆発してしまいそうだった。文字通り。ぼくの体を巣食う植物のようなナニカは既にはち切れんばかりに成長し、ギリギリぼくのかたちを保っているに過ぎない。
気を抜けば体から葉っぱやら根やら茎やらが皮膚を破って飛び出し、ぼくは人間くらいの大きさの木か花になると思う。それはもう、母さんに比べてみれば随分小さいだろうけど。
大人しく立っていてもダメだ。静かに足の裏から根が這い出し、二度と動けなくなりそうだもの。
できる限り素早く足を動かして、母さんの核に近づく。みんなに合図しながら。
「あれが勇者の剣……！　勇者さま！」
「うん、あれを取ればいいんだね！」
セーニャちゃんの長い髪がまばゆい光に照らされてキラキラと光っている。大人の姿のベロニカちゃんが目をキラキラ光らせてぼくを見ている。あぁ、この双葉がそのままでいられますように！
手を伸ばすふりをして。
闇の気配を感じて振り返る。
さぁ、最後の戦いを始めよう。

なしのつぶて

預言の勇者さまはかなり変なヤツである。胡散臭い「預言」に導かれて勇者の相棒を名乗っている盗賊崩れも十分変なのだろうが、勇者さまもかなり変なヤツだ。

色々と変なやつだがまず、名前が無い。ぶっちゃけ不便だ。なんて呼べばいい？　育ちを聞くに、この歳まで名前をつけてくれる相手がいかったんだろうが、そういう育ちのやつだって普通は自分で適当に名乗ってるもんだ。デルカダールの下層にいたこともあるらしいんだから、まさかひとりだったからって、この最近まで名前の概念すら知らなかったわけじゃないだろ。

ちゃんと名乗った相手の名前は呼ぶしな……。

「なぁ……」

「よろしくカミュ。お返しに名乗りたいところだけどぼくには名前がない。だから何とでも呼べばいいよ」とごく当たり前の顔をしてのたまってきた出会いの日を思い出す。なんつーかその前に「俺の名前はカミュ。覚えておいてくれよな……」とか思いっきりかっこつけて名乗った俺に対してのタチの悪い意趣返しかと思ったぜ。

どうやら悪気はないらしい。

「……」

というかだ。育ちが育ちのせいでそもそも他人に呼ばれることに慣れなさ過ぎて、ハッキリ呼んでも気づかねえんだよな。肩を叩くとか、目が合ってでもない限り。無視しているわけじゃないってのが哀愁を誘うというか、勇者さまなんて、実際会ってみるまでは如何にも高貴そうな人種だと思ってたが、そういうわけじゃないもんだ。

高貴な人間というよりは俺のような底辺で生まれ育った人間の方が感性が近い。明日どころか今日の食事にすらありつけず、あたたかな寝床を知らず、その上家族もいない。特別な人間らしく、大樹を母と呼ぶが……ここまで助けて貰っていたわけじゃねぇな。

どんなに金やお宝を貰っても割に合わない「勇者」とかいう大層な役目を与えるなら、前払いとしてなにか人並みに育てるようにしてや

ればいいのによ。
　そういうわけで、浮世離れした勇者さまが生まれたわけだった。真横で「なぁ」つってんのに返事しねえ程度の……。耳は聞こえているよな？　聞こえているはずなんだが。
「なぁ」
「あ、ぼく？」
　ようやく振り返る。マジのキョトンとした顔だ。本気で自分が呼ばれてないと思ってたのか？　嘘だろ？
「あぁそうだよ。名前もなしにどうやって呼べって言うんだ」
「なんでもいいよ。なぁでもおいでも」
「いや不便だろ……てかなぁで返事してねぇだろ……」
「そうかな。じゃあ『名無し』でもいいよ。ぼくにとっては別に蔑称じゃないから気にしないで」
「相棒をそう呼びたくないの、分かってくれよ」
「じゃあ『相棒』で。カミュもそうやって呼ぶでしょ」
「二人とも、何話してるの？」
　押し問答を見かねたのか、単にうるさかったのか。ベロニカがやってくる。
「呼び名がどうとかそういう話だよ。なんでもいいじゃない、ねぇ？　ぼくに名前はいらないよ。今更覚えられないって。慣れてないし、咄嗟に反応できないさ」
「ゆっくり慣れたらいいじゃない？　別にしっくりしなくてもいいと思うわよ。不便なのは確かだし」
「えー……まぁ、ベロニカが言うならそうだろうけど」
「おい」
「カミュが言うのならそうだろうけど！」
「おう」
「でもいいよ。勿体ないだろ。ぼくは悪魔の子らしいし、たまたま同じ名前の子が可哀想じゃないか。後ろ指を刺されてしまうよ」
　最もらしいことを言って誤魔化そうとしているのが見え見えなのには気づいていないらしい。純真な、人馴れしていない勇者サマ。嘘

も誤魔化しも赤ん坊並み。まだセーニャの方が嘘をつけるってレベルだ。
　どうやったらこんな人間になるのか一度「お母様」に聞いてみたいもんだ。
「あら、本当は勇者なんだから気にしなくていいのよ。ちゃんと認められる日が来るの。むしろ縁起のいい名前になるんだから。
　というかあたしたちがラムダから来たっていうのにそんな弱音を吐くなんていい度胸ね？　今に世界中で認めさせてやるわよ」
「ベロニカが言うならそうなるんだろうけど、じゃあそうなってからにしよう。頼むよ。今はいいだろ？」
　ベロニカのことはいつからか異様なまでに尊敬しているらしいので聞き入れるかと思ったが。案外頑固だな。
「世界を救ってから名前をつけるつもり？　それじゃあ遅いわよ。少しずつ名前を広げていかなくちゃ定着しないわ」
「定着しなくていいよ……ほら、ユウシャって称号があるじゃないか。先代勇者の名前だってぼくはベロニカとセーニャが教えてくれなきゃ知らなかったよ？　カミュは知ってた？」
「ん？　あー……まぁ俺は勇者の預言を聞いてからちっとは調べたからなぁ。覚えてはなかったがどっかの本で名前を見たかも……」
「へぇ、カミュって本読むの？」
「読めなくはないってだけだぜ？　普段は読まねぇよ。
　じゃねぇよ。話そらすんじゃねぇ。お前の名前をどうするかって話だ。いっそ物語からつけてやろうか？　物語でありがちな名前ならありがち故に悪評なんてつかねぇだろ？　なんでもいいしあとからもっと考えて変えてもいい。どうだ？」
「……やめておこうよ。反応できる自信は全くないよ。意味がない。なんとでも呼べばいいけど、名前だけはダメ。ぼくには勿体ないよ」
　頑なに首を振り、突っぱねられる。まだ距離を詰めるには心を開いていないということなのかもしれなかった。まずったかな、勇者さまに嫌われなきゃいいんだが。
　なんだかんだ絆されているとはいえ、俺は打算でここにいる。預言

者曰くの、贖罪のためなんだ。そのチカラを使ってもらうまでは少なくともコイツを守らなきゃならねえし、信頼を勝ち取る必要がある。嫌われるなんて以ての外だ。

最近は、なんつーか危なっかしくって見てられねえで、らしくもなく世話焼いちまうけど。デクの時といい俺って世話焼きなのかもなあ。昔からこんなに要領よく動けてたら、マヤも……。

いや。いや、いや！　無駄なこと考えるなんていけねぇ。そんな後悔したって腹は膨れないし、マヤは戻らない。

「わかった、わかった。じゃあまた今度な」

「今度もないよ」

「気を悪くしないでくれよ……」

「？　してないよ。ぼくが気を悪くするようなこと、あったかい？」

そうだ、こいつは変なヤツなんだった。心底まったくもって毒気のない「気を悪くしていない」きょとんとした顔を向けられて思い出す。

嫌がっちゃいるが、別にそれで嫌な思いはしてないってか。

わけわかんねえ。わけわかんねえけど俺がこいつの立場で、どうしても譲れないポリシーをねじ曲げようとされたら口ではなんと言おうとも嫌なものは嫌なんだがなぁ。

なんて考えていると、ベロニカが手招きしてきた。何？　屈めって？

「あとでしれっと名前を呼んでみて定着させたらどうかしら」

「真横でハッキリなぁって呼んでも反応しねぇやつがいきなり付けられた名前なんて分かるか？」

「……それもそうね。じゃあどうしてこんなに嫌がるのか理由が分からなきゃどうしようもないわね」

あの時はそれだけだった。たしか。それなら何回か不意打ちで試したり勝手に名付けたことを宣言したり、なんなら赤ん坊が名前をつける瞬間に立ち会うまでしたがどうにもこうにもこいつの「名前嫌い」……いや、「名前呼ばれ嫌い」と言うべきか？　は直りやしなかったのだ。

なんつーか、あれほどまでに嫌そうな顔をされたことがない。

さいごのさいごまで。どんなに理不尽な目にあっても。

浄化の炎

「ぼくに殺されるなんて不名誉だろうけど、ごめんね」

異様な光景だった。

完全な不意打ちをまるで知っていたかのようにいなした無名の勇者は緩慢に闇の気配を放つ大剣を構え直した。

既にこちらなど眼中に無い。私の後方を不気味な新緑の目は見通していた。

奴の生気のない青白い肌、この距離からでも放たれる異様な死の気配、執念に燃えギラギラと光る目だけが妙に生々しく、こんな恐ろしい容姿でよくあのグレイグを真実に導いたものだ。ざんばらに乱れた髪はだらりと垂れ下がり、たとえ嗅覚が機能していない人間だろうと奴を見れば死臭を感じるほど壮絶な容貌だった。

忌まわしいあの日は今ほどの容姿ではなかったとはいえ、一般的には勇者こそ人でなしの風貌、魔物のようにさえ見えるというのに！

あぁ悍ましい光の奴隷め！

「さぁこいよ、ウルノーガちゃん？　ぼくはお前を知っている。お前の狙いも企みも。勇者のチカラはくれてやれない。部下にばっかり矢面に立たせてないでとっとと戦おう。ホメロスちゃんをぶっ殺すのも尋問するのも後でいいよね。

ぼくがお前をまともな方法で殺せるうちに頼むよ。その方がいいだろう？　お前を倒して、役目を終えさせてくれよ！」

膨大な光が勇者の肉体からこぼれ落ちていく。勇者は闇の大剣を構えた手と逆の手でやすやすと大樹に宿る勇者の剣を掴み取り、それも構えた。

散々挑発されたというのに、私は口を開くことさえできなかった。グレイグが、悪魔の子が、そして汚らわしいドブネズミどもがそこにいて、私の後ろにはウルノーガ様がついているというのにどうして。

簡単な事だ、私はただただ圧倒されていたのだ。叩きつけられるような死の気配に慄いていた。この期に及んで、ただの恐怖で動けなくなっていた。

光に縫い止められる。忌まわしい光が溢れかえり、周囲を照らす。捨て身の勇者はこちらなど見向きもしない。
大樹の葉がざあざあと擦れ合う騒音の中、勇者は吼えた。
「僕はお前を殺すんだ！　その為に、ここにいる！」
とうとうモーゼフ王の肉体から姿を現した……いや、引きずり出されたというべきウルノーガ様もまた、驚愕の表情をされていた。勇者が既にここまで成長していたとは想定外だ。先程までは全く計画通りであったというのに！
まったくもって劣勢だ。直感でしかないが、既に私は戦闘不能に等しい。なんの負傷もしていないというのに詠唱のひとつも紡げず、指一本動かせない。対外的には私以上の裏切り者のグレイグだけが私を険しい表情で見張っている。
だというのに、あの勇者、すぐにでも死んでしまいそうだ、と思った。
膨大な光のチカラを行使しながら、敵を封じ自分の陣地で戦いを強制させる完璧な作戦を実行する。これまでこちらが得ていた情報など役に立たないだろうし、実力を隠していたのを気づかせないというのはそれだけで強者の証明だろう。
だが。ウルノーガ様に剣を向ける無傷の彼の方こそ瀕死に見えたのだ。
魂を魔に捧げた私よりも、砕け散り摩耗しきり、ほとんど死体となった体を執念だけで動かす化け物だ。ただウルノーガ様を倒すためだけに、ここまで奴は生まれ、育ち、そして死ぬのだろう！
「母さんの声が聞こえる。ウルノーガを殺せって！　至上の命令だよ！　必ずや成し遂げてそっちに行くからね！」
こんなものが勇者なものか。かつてのローシュを思い出せ、コレが

あのような強い輝きの魂の持ち主なものか。こんなものはデク人形にすぎない。せいぜいが大樹の操り人形よ。まがい物の勇者を十六年間も探し回っていたというのか。

しかし偽物なりによくできている。偽物だが創造主は本物だからだろう、ソレは勇者どころか人間ですらなかったが、勇者の剣を抜くことが許されている。勇者のチカラのようなものを使いこなし、勇者の仲間になるはずだった人間どもを浅ましくも集め、それらしく取り繕って舞台を整え、私と戦うことを望んでいる。

腕や足から伸びた操り糸が見えるかのようだ。そのようにさせたのは大樹だろうよ。何も知らない哀れな存在なのだ。

まったくもって好機である。勇者の剣を奪い、そのまがい物の勇者のチカラ……いや、勇者の権利と言うべきだろうか……ならば、本物よりもずっとたやすく奪えるだろうし、本物より扱いやすいだろう。

ただ問題があるとすればコレは生きる執着なんてものを持ち合わせていないデク人形であることだろう。紛い物の魂に刻まれた至上命令にのみ執着し、残酷な母に従うだけの存在。懸念すべきは命が惜しくない相手というのは手をつけられないということだろう。

ゆえに無敵なのだ。後先考えぬ無敵の相手と戦わねばならない。捨て身の相手は厄介である。まぁ、仲間のことはそれなりに大事にしていたようだから、そちらを盾にすればなんとでもなろう。

せっかく手に入れた手駒は気迫に負けてしまったようであるし、そこのところは……まぁ期待もしていない。グレイグが勇者の手を取ったと知った日から非常に不安定であった。ここまで案内役として使えただけ御の字だろう。

しかし。近寄ることさえままならぬ。風を操っているのか、アレの体から吹き出る強い風と鋭い葉がこちらを切り刻む。

おのれ、悲願はすぐそこだというのに。勇者の星の伝承がまるっきり間違っているこの現代において、この私を倒せば邪神がまんまと復活することも知らない愚か者めが。

好機と見たのか輝く剣を携えて、悍ましい人形がこちらに飛び込んでくる。切っ先が煌くのを見て、なんとか受け止めれば逆の手が振る

う闇の大剣が襲い来る。体格的に不可能な動きを易々とこなしてみせるか。もうその肉体をもたせる必要はないのだろう。奴の体が軋む音が聞こえてくるかのようだ。
　人形を相手取りながらもそれだけではない。奴の仲間たちも当然攻撃してくるわけだ。一旦は引くべきか……人質をとるべきか。
　そのわずかな逡巡は、命取りだった。
「ベロニカちゃん、ぼくごと燃やしちゃっていいよォ！」
「あたしはそんなに不器用じゃないわ！」
「ベロニカちゃんが完璧でもぼくは枯れ木みたいによく燃えるからねえ！」
　宣告通りの炎の魔法は人形に押さえつけられて避けられず、追撃の一撃がこちらの脳天を叩き割ったことだけが最後に認識できたことだった。
　炎に包まれる。光に還される。人形が手を振った。
　どこかで耳障りな女の声が笑っている。女の声？　そんなわけは、まさか！
『派手に失敗したのう、わし。
　さぁ行こう。ローシュに一緒に謝りに行かねばな』
　ぐいっと手を引かれる。手を引いた相手は溶けるように消えてしまい、ひとりで走り出す。永い永い間胸の中にあった焦燥も、黒い感情もどこかに行ってしまい、途方に暮れる。
　ただひとりぽっちで光に照らされた道をとぼとぼと歩いていると遠くにかつての盟友の背中が見えて、その背につい、
「ローシュ！」
　嗚呼焼かれる、焼き尽くされる、欠片も残さず。
　白い光の中で、振り返った友が、こちらを見て……。

憐憫の愛（終）

魔導士ウルノーガを斃（たお）し、その役目を終えたソレは耐えきれなくなったかのように両手に持っていた剣をガシャン、と落とした。ほぼ同時に崩れ落ちるように膝をつく。そんなソレに仲間たちが駆け寄り、冷え切った体を起こしてやった。

ソレの体に傷らしい傷はなかった。一方的に「邪悪」な意志を持ったただの魔術師を屠っただけの戦いで、一撃たりとも反撃を受けなかったからだ。だが、ソレの様子は瀕死のそれと大差なかった。ソレの身体からは今も光の粒子が次々と零れ落ち、生命を蝕まれたかのように、喘ぐように、やっとのことで呼吸をしていた。

仲間たちには彼がどうしてそうも苦しむのかわからなかったし、ソレの方はといえば、もはやまともな弁明ができるほど時間が残されていなかった。

仲間たちはソレのありさまを先ほどの戦いのせいだと考え、この場を離れるべきだと考えた。だが。

「ここでいい……ここがいいんだ。ここより相応しいところなんて、どこにもないでしょう？」

健気なソレは仲間たちを止めたのだった。事実、最早命の大樹のお膝元以外でとうに死亡した少年の肉体がわずかでも生き長らえる……いや、生きているふりをすることなど不可能なのだった。

その時、彼らは誰一人として空を見なかった。大樹の深奥において空など欠片も見えなかったし、誰も彼もそのような余裕はなかった。とはいえ、すでに空に終焉の扉は開いていた。解け、消えゆく世界の終わりはすぐそこに。ソレのからだから零れ落ちた光の粒子のように、空からゆっくりと世界は分解され、音もなく消えてゆく。

魔導士ウルノーガを屠り、彼を無力化した今襲い来るは次なる破滅の足音である。だがこの剪枝世界に対抗するすべはない。「勇者」の穂木は魔導士ウルノーガを光の下へ送ることはできても、それ以上は叶わない。借り受けた死者の器はすでにチカラを使い尽くして光を失い、ソレの歩みはここまでである。

「邪神」の復活を粛々と受け入れるほかない、と母なる大樹は理解した。すなわち、この世界の存続はないものとして決定した。

幸いこの世界は十六年も前から剪枝世界と定められている。この世界を剪定することなど何の問題にもならない。来るべき未来がとうとうやってきた、それだけのこと。必死に足掻いた寄る辺のない穂木に永遠の安息の時がやってきたのだ。

ただ、仲間たちに囲まれた穂木を観測していた大樹はふと、生前を思い出した。何も無かった闇の世界で生まれた聖竜だった頃の自分を。最初は孤独の戦いだったが、そのうち闇の向こうから神の民が現れ……一人ではなくなったこと。なぜ今思い出したのか。なぜ今更、情に似たものを抱いたのだろう。大樹は自分で不思議に思った。感情らしきものを抱くのは久しぶりのことだった。

穂木の活躍によって十六年間の存続を許されたこの世界。世界の終わりが確定した今、大樹こそ無数の世界との接続から離れ、ある種の集合知から脱し、ほんの少しかつての自我を取り戻した……そんな奇跡の欠片が作用し、母と呼ばれ続けた偉大な木はその時、本当の意味で母となったのだ。

温度のないはずの大樹は温度のないはずの穂木に一つだけ報いてやることにした。遅すぎた、最期の慈悲である。最初で最後の、親の情である。

自分を一途に慕ってくれた、幼く儚い命へのひとつの報いである。

情報収集完了　勇者再現体　停止せよ

ソレの頭の中に、ようやく求め焦がれた母の声が響く。懐かしくも愛おしい、無機質な声。「勇者」やその仲間、あるいは現行の生命たちに聞かせるわけではない、ただの「再現体」に終わりを知らせるために合成された音である。大樹の本質は機械ではないが、ある仕組みに

造られた、命令を受諾し遂行するためのモノに対する態度はまさしく機械だった。
　その声を聞いて、ソレはあどけなく笑う。嬉しそうに、それだけで心底報われたように。
「えへへ……ぼく、倒したよ……母さん……」
　剪枝世界２７６２６９の　実行停止カウントダウン開始　全取得情報を　根幹世界に送ります……　しばらくお待ちください　このプロセス終了まで　シャットダウンは　無期限延期されます……
「ベロニカちゃんは無事？　みんな、大丈夫？　ぼくも、はは、まだ生きてるよ。結構無茶したつもりだったんだけどな。この体って丈夫だね。流石はユウシャっていうか……」
　ソレは呑気に笑っていた。母が話しかけてくれたことは嬉しかったが、自分はもうどうせ先は長くないと確信していたので、もうどうだってよかったのだ。どんな命令もすぐさま実行できるような状態ではなかった。そう、有り体に言って「今すぐ死ね」という命令だとしても、それさえ実行できるような余力はなかった。
　勇者再現体の　命令拒否を確認　暴走状態と認定　パターン：不明
　勇者再現体と　大樹との接続切断を　実行します
「うん、じゃあね、母さん」
　だから、一方的な別れだってすんなり受け入れた。とうの昔に痛みは麻痺し、悲しみも憎しみも消え失せて。そこに残っていたのは僅かな名残にすぎないのだから。
　だけども。大樹の方こそ変わっていた。我が子の死の気配をかぎつけて、淡々としていた「声」に迷いが生まれた。
　……少し待ちなさい。どうせこの世界はもう終わりなのですから。付与：勇者再現体の自我データ保持。持続時間は生存時間と比例します。ええそれでは、さようなら。私の息子よ。今までよく頑張りましたね。
「……母さん？」
　手向けにあたたかな風がソレを包み込む。ある日の義理によるものではなく、親愛を込めて。息絶える間近だったソレは奇跡のように

息を吹き返し、赤みの増した頬で、不思議そうに見上げた。
だけども、奇跡は二度も起きないから奇跡なのである。すでに世にも美しい、すべての根源は沈黙していた。
それでも野暮に「もしも」を語るなら。彼女は僅かに微笑んでいただろう。

数多の消えゆく剪枝世界・唯一の根幹世界をすべて合わせた樹状世界は言うなれば。立派な装丁の、一冊の本だ。
それは巨悪を倒す「勇者」の、偉大な旅路の物語。いつだって「勇者」は「悪」を滅ぼし、弱きを助け強きをくじく。
苦難の旅路、絶望と希望の起伏があり。「勇者」は仲間たちと手を取り合い、光のチカラを以って闇を打ち滅ぼす。かくして世界は救われ、それまでバラバラだった人々は団結し、その伝説を語り継ぐ。
「魔王」を打ち倒し、「邪神」を光へ返し、「邪悪」な意思を打ち砕く。物語のクライマックスはいつだってそのような、勧善懲悪じみたカタルシスに満ちている。
失敗した「勇者」の物語や、「勇者」と呼ばれなかったモノの話など、いつだって希薄なもの。特段讃えられることもなく、有象無象として「物語」の中に埋もれていく。
「勇者」ならざる「穂木」の物語はそれ以下だ。何かの間違いで世界が存続したとて、「邪神」に滅ぼされることが確定している。語り継がれるべき「勇者」は長らえられず、悲劇的な終末の世界で名もなき凡庸な死として消えていく……。
だけども。
穂木は足掻いた。滅びゆくことが確定した、剪枝世界で。その世界でのことは、ただの情報として根幹世界に吸い上げられ、最良を模索するちっぽけな肥料とされるのだろうけど。それでも。

その努力を、ずっとずっと観測していた大樹はほんの少し絆され。生まれた闇に還るはずだった穂木はひとときの生存を赦されて。

その枝は剪定されている。成長することのない世界で、時が止まったような終末の中。穂木は愛おしい仲間たちと静かに最期の時を過ごすだろう。それを、もはや物言わぬ大樹が静かに見守っているのだ。

剪枝世界で足掻け穂木よ。